

琵琶湖の周辺に水田が作られるはじめたのは、いつ頃のことか。また、どのようにして耕地が拡大していったのか。この問題を解く最も有効な方法は、地中に埋もれた古代の水田跡を発掘調査によって明らかにしていくことでしょう。農耕技術の発達や変化の様子は、遺跡出土品から窺うことができます。

## 1. 初期水田の様子

滋賀県内の発掘調査を振り返ると、研究史上に輝く二つの弥生水田が発見されています。一つは、守山市に所在する服部遺跡の水田跡、もう一つは、近江八幡市に所在する大中の湖南遺跡で、それらは沖積平野の中でも、琵琶湖に近い、低平なデルタ地帯(三角州)で発見されています。

### (1) 服部遺跡(弥生時代前期)

地下約2mの地点から水田跡が発見されています。水田区画は、大きいものでも一区画が180㎡。中には20㎡程度の小さなものまであり、通称「ミニ水田」とまで言われたことがあります。調査地の中央で確認された水路を軸に、傾斜地形に沿って大小の区画を整然と並べ、傾斜地の上位から下位の田んぼへ水が畦を乗り越えて配られる仕組みとなっていたようです。



写真3-6-1 服部遺跡の水田跡

### (2) 大中の湖南遺跡(弥生時代中期初頭)

湖底から発見された水田跡には、杭と矢板で作られた水路跡が数百mにわたって掘られており、灌漑と排水の役目を果たしていたようです。見つかった水田跡は、水没時に攪拌削平されたのか、畦が見られません。水田面には柵状の杭列が見られ、それを畦の痕跡と見るならば、一区画は一辺が100mと90mで、約9000㎡とたいへん大きい区画となります。そのため大区画の中に、さらに小さく区画する手畦のようなものがあったとする意見もあります。



写真3-6-2 大中の湖南遺跡の水田跡  
(滋賀県立安土城考古博物館所蔵)



## 2. イネの品種

守山市に所在する環濠集落下之郷遺跡(弥生時代中期後葉)は、地下水の豊富な場所に位置していることから、出土する動植物遺体の保存状態が極めて良好です。

井戸跡や環濠からは炭化していない稲粃が見つかり、DNA分析を行った結果、「熱帯ジャポニカ」種のイネが半数ほどを占めていました。近年、農学や遺伝学では、世界のイネを「インディカ・ジャポニカ」に大別したうえでジャポニカを熱帯型と温帯型に分けるようになってきています。日本考古学の通説では、弥生時代の稲作は大陸から朝鮮半島を経由して北九州へ伝播してくる「温帯ジャポニカ」の稲作が主体だと考えられてきましたが、近年では下之郷遺跡をはじめ日本各地の弥生遺跡から出土したイネに熱帯型が多く含まれていることが判ってきました。「熱帯ジャポニカ」種のイネの特徴は、一般に背丈が高く、穂や葉が長く、穂数が少ないことです。生育は粗放的な稲作環境に適応するといわれ、気温や乾湿状態など生育環境を整えないとうまく育たない「温帯ジャポニカ」とは、対症的だといわれます。



写真3-6-3 下之郷遺跡出土の稲粃



図3-6-1 熱帯型と温帯型の生育形態

## 3. 田植えと稲刈り

水田跡の田面には、時として稲株の痕跡や人の足跡が確認できる場合があります。それらは、当時のイネの栽培方法が直播法か移植法なのかを知る手掛かりとなります。岡山県百間川遺跡の水田跡には、無数の稲株痕が確認され、その配列状態から田植えが行われていた可能性が指摘されています。

弥生時代前半期のイネの収穫には、石包丁が使用されています。登熟期を迎えた田んぼで、捻実した稲穂を選んで穂摘みを行うための道具です。大中の湖南遺跡では穂摘みされた稲穂の束が発見されています。

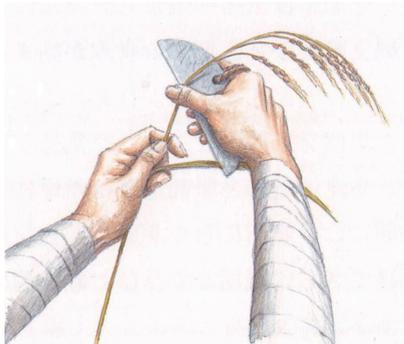


図3-6-2 穂摘みの様子